

飲食店支援 マスクケース寄付

中央区の 望月印刷 女性チーム企画し 1万枚



「収束時、10区の花巡りを」

コロナに
 負けルナ

寄付された紙製のマスクケース。表面はサクラソウをモチーフにした4種類のデザイン、裏面は10区の花を紹介している



新型コロナウイルスの影響を受けている飲食店を支援しようと、「望月印刷」（さいたま市中央区）は、食事中にマスクを取り外した際に使

う紙製のマスクケース1万枚を作製し、さいたま市に2千枚、さいたま市商店会連合会に8千枚を寄付した。市内の飲食店などに配布される。

同社のデザイナーや営業職の女性社員5人で構成する女性企画チーム「La Bit（ラ・ビット）」が、10月に「GoToイート」キャンペーンが開始されるのを前に、市内の飲食店を応援しようと企画した。

表面のデザインは市の花のサクラソウをモチーフに4種類あり、2500枚ずつ作製。裏面は共通デザインで、10区の花の開花時期や場所、花言葉を掲載した。

大きさは縦21センチ、横12センチで普通サイズのマスクが収まる。さいたま市とマスクを掛け合わせて、「SAITAMA

SK（さいたまマスク）花めぐり」と名付けた。コロナが収束した時に、10区の花を見に市内を巡ってほしいという願いも込めた。

同社の望月論社長は「女性企画チームがウィズコロナの生活で困っていることは何だろつかと考え、提案があった。飲食店の皆さんにぜひ使ってほしい」。チームの菊池佳子リーダーは「マスクを外したのはいいけど、かばんにそのまま入れるのも、テーブルに置くのも抵抗がある。』しまっておけるものがあればいいね」と話し合っており、デザインもそれぞれが考えた」と話した。

清水勇人市長と同連合会の大郷恒吉会長が23日、望月社長と菊池さんに感謝状を贈呈した。清水市長は「当面はマスクをする必要があるため、ありがたい」。大郷会長は「飲食店に配布する。感染防止に役立てば」と期待していた。

右から望月論社長、清水勇人市長、大郷恒吉会長、菊池佳子リーダー
 23日午後、さいたま市役所

（杉野孝）